

アンシャン・レジーム脱却を図る18世紀のフランス人を見ると 「おかしいと思いつける」大切さがわかる



分によって社会的にふさわしいお金の使い方が決まっていたし、道徳的な制約もあって自由に使うことが許されていなかったのです。

こうした研究を通じて、自由主義の考え方がどういう文脈で出てきたかを考えれば、いつの時代にも普遍的に正しいとはいえないことがわかります。当然、耐用年数もあると考えなければなりません。このことから、自由主義的経済を過度に信頼するのも問題だといえます。

近代的経済行動が始まった18世紀

一橋大学の商学部に入学したのは、漠然とした気持ちからでした。学問で食べていけると思っていなかったのが、社会に出たら役立つと思ったのです。ところが、2年のときに思想史を学んで、これを続けたいと思うようになってきました。18世紀に関心を持つことになったのは、卒論のテーマを決めるときに読んでいた本が、フランス革命のころのコンドルセについて書いたものだったからです。原書で直接読みたいと思い、フランス語の勉強を始めました。一度フランス革命期の勉強を始めると、後は芋づる式にテーマが見つってきたのです。

18世紀には、近代的な意味での経済行動がはっきり現れてきました。消費が倫理的な価値判断から少しずつ解放されて、経済的行動という枠で見られるようになってきたのです。このように身分制度が行き詰まってくると、さまざまな思想的リアクションが起こってきます。制度疲労を起こした社会がどうなっていくかを見る上で18世紀のフランスは格好の素材なのです。

長らく研究しているのが、「奢侈論争」です。当時はキリスト教的倫理観から、個人的快楽の追求である奢侈は許されないことでした。また、外観が社会的な差異化機能を果たしていた当時では、平民の奢侈は貴族階級への挑戦と受け止められたのです。

自由主義経済、市場主義経済にどっぷりと浸っている現在では、自分で稼いだお金を自由に使うのは当たり前のことです。しかし、これはある時期になって成立した考え方なのです。それまでは、身

かつてアダム・スミスの『国富論』がもてはやされました。しかし、スミスが考えていた人間というのは「自分さえよければ」というのとはずいぶん違います。人間の行動には他人の視線というブレーキがあり、むき出しな欲望どおりの行動を行っているわけではないのです。市場主義経済下にあっても、お金を使うことの社会的意味を無視することはできません。

18世紀に台頭してきた自由主義的な考え方は、法律に反しなければ何をしてもいいということではありません。そこが誤解されているため、市場経済万能主義には、人間や経済行動の社会性を無視している居心地の悪さがあります。

奢侈論争を研究することは、さまざまな関連した課題の立て方を可能にしてくれるのです。その点で、現代の問題ともつながりがあります。現代社会に対する直接の答えがそこにあるわけではありませんが、モデルを見ることで視野が広がり、物の見方が深くなっていくでしょう。

18世紀フランス人に異邦人的面白さ

18世紀の人たちは、我々から見るとまさに異邦人で非常に面白い。今の感覚と全く違うことが常識としてまかり通る不思議さがとても新鮮です。なぜこうなるのだろう？ということ成り立たせている社会構造や法律、イデオロギーがあります。そこまで踏み込んでいくことで学問になるわけです。その驚きがなくなると、研究の楽しみも半減です。

面白いのは、「侮蔑の滝」という身分の上下関係です。それに対す

る執着はただごとではありません。彼らにとっては、行列や教会の席次の上下が死活問題なのです。お祭りの行列でも、たとえば石工と靴組合のどちらがよい席次を取るかを巡ってケンカが始まります。なぜ、席次を巡ってそこまで頑張れる社会なのか、今の人間には不思議なところなのです。

また、当時の民衆は市場経済原理なんて信じていませんから、価格が高騰することにとっても厳しい。天候が悪くて穀物が不作になって、パンの値段が上がったとします。すると町の労働者は、こう考えます。「王は何のためにいるのか。パンを高く売のを取り締まれ。穀物を買い占めた人間をつかましろ」と。あるいはパン屋を襲撃してパンを持ち出すが、自分が妥当だと思う代価を置いてくる。こうした過激な行動をしても、自分たちは、正義を王様に代わって実行しているだけだと思っているのです。市場経済にならされてしまった我々とは、発想が全く違います。

身分制度が成り立つには、それぞれの身分がうまく安定していることが重要ですが、現実的には上の身分にあがれるルートがあることが欠かせません。生まれたら一生その身分というのはカースト制度です。身分制度では、お金を貯めれば地位を買ったりして上の身分にあがれるという、ある程度の流動性があることで、社会が活性化するのは、

変わるという期待を持ち続ける必要性

歴史は、直接役立つものではありません。近代的な歴史教育が始まったのは19世紀で、国民国家を形成する手段としてです。近代歴史学はその片棒を担いできたことを反省しなければなりません。歴史を学ぼうという人には、無理やり役立たせようとするような狭い捉え方ではなく、もっと手間のかかる歴史の役立て方を考えてもらいたいと思います。

18世紀の思想史を勉強すると、アンシャン・レジーム(旧体制)といわれる社会の中で、批判を繰り返している人たちの存在がわかります。彼らは、そのスパンは別として世の中は変え得るものだという信念を持って行動していました。

世の中の諸々のものは、どんなに頑強に見えても変え得るものであるということを、学生には認識してもらいたいと思っています。今、社会のどこかに違和感があったとしたら、それは変えられるのです。もちろん、旗を揚げればすぐ変わるというものではありません

ん。簡単なことではありませんが、30年、50年、あるいは100年のスパンで見れば、堅固に見える国家体制や社会制度、イデオロギも変わっていきます。

一人の市民として生活しながらも、今の社会は絶対ではないということは、意識してほしいと思います。自分で感じている社会のおかしな面は自分が悪いのではなく、社会に問題があるのです。こうした社会を変える方法は、不都合なことを仕方がないと諦めるのではなく、「おかしいと思いつけること」です。変わるという期待を持ち続けることが重要なのです。

集会的記憶をたどるという方法論

歴史の研究は、当然ですが対象の時代の文献や資料を研究することになります。研究の一つの方法論として、「集会的記憶」をたどる方法があります。

たとえば、フランス革命100周年行事を行うとします。それを開催するには、フランス革命をどう位置づけるかという政治的な思惑が働いているはず。言い換えれば、革命から100年後の人たちが、過去をどう見たかという分析素材となります。フランス革命という対象をリアルタイムで追いかけるのではなく、100年後の人たちの視点を通じて分析することもできるわけです。

実際に1980年代にフランスで「記憶の場」という大きなプロジェクトがありました。1999年には研究会仲間と行っていた共同研究の成果を書籍にまとめたのですが、2006年には大学院で立ち上げたプロジェクトも論文集になりました。(談)



社会学研究科教授

森村敏己

Toshimi Morimura

1983年一橋大学商学部卒業後、
一橋大学社会学研究科修士課程入学。
1984年10月ナント大学人文学部留学(1985年6月まで)、
1988年10月オート・ノルマンディ大学人文学部留学
(1989年9月まで)を経て
1990年3月一橋大学社会学研究科博士課程単位取得退学。
1990年一橋大学社会学部助手、
日本学術振興会特別研究員を経て、
1994年10月一橋大学社会学部専任講師、
一橋大学社会学部助教授、
一橋大学大学院社会学研究科助教授を経て、
2006年4月より、一橋大学大学院社会学研究科教授